

が交差したことから、両酵素は恐らく同一蛋白質分子であるものと推論した。一方、今回得られた抗体を用いて本酵素の酵素免疫測定法を組み立て若干例について検討し有効な指標になると思われる結果を得た。

#### 4. 作品『フランケンシュタイン』とその周辺

加茂 映子（京都大学医療技術短期  
大学部教養科）

『フランケンシュタイン Frankenstein』(1818) をメアリ・シェリ Mary Shelley (1797-1851) が書き始めたのは、彼女がまだ18歳になる前のことである。この時すでに2回の出産経験があり、第一子を産んだ時メアリはまだ未婚で、しかも生まれた女の子は名前もつけられないまま数日後に世を去っている。正式にパーシ・シェリと結婚した後も、メアリの妻としての位置は必ずしも安定したものではなかった。作者が置かれたこのような状況を「その周辺」と規定した。作者の境遇と作者の苦悩を作品の奥に見通そうとする時、この作品は単に科学の発達に乗った怪奇小説だとはいえなくなるのではないだろうか。

幾つかの奇怪な殺人事件を含む、多くの死が描かれるこの作品は、18世紀後期から19世紀初期に英国において流行したゴシック小説のひとつである。実際、この作品が書かれたきっかけは、メアリの夫を含む文士たち4人が1816年の夏にスイスの別荘で連日の雨に閉じ込められ、気散じに各自が怪談を書こうという提案がなされたことにある。当時、ダーウィン博士（チャールズ・ダーウィンの祖父）の実験やガルバニー電気について知られ始め、生命の原理についての関心が高まっていた。フランケンシュタインは錬金術と科学の研究の結果、生命のないものの中に生命を注ぎ込むことに成功するが、それを創造したフランケンシュタインと、創造された生き物との間には終りのない抗争が展開する、というのがこの物語のあらすじである。

このようにきわめて不自然な仕方です。

たこの無辜の生き物は、その醜悪な外見のために社会に容れられなかったが、野望に駆り立てられてこの生き物を創ったフランケンシュタインもまた、社会を追われる。

メアリは科学万能主義の萌しに警告を發し、男性の野望に皮肉な一べつを投げかけた。メアリの第一子が名もなく死んでいったように、彼女の産んだこの醜い子にも名前はなかった。メアリは創られたこの醜悪な生き物の孤独に満腔の同情を寄せている。あたかも彼女自身のそれを重ね合わせるかのように。

#### 5. HIV-1 に対するモノクローナル抗体開発の現状

岸下 雅通（京都大学医療技術短期  
大学部衛生技術学科）

1987年9月より1年間、NIHにてAIDSの原因ウイルスのひとつであるHIV-1に対するヒトモノクローナル抗体開発のプロジェクトに参加して、得られた経験を以下の如く報告する。

HIV-1に対するマウスモノクローナル抗体は、1985年Veroneseらによる初めての報告以来、主にHIV-1の遺伝子gag産物のp24、同じくenv産物のgp41、gp120に対するものが、数多く樹立されている。また、近年Banapourら2、3のグループより、ヒトモノクローナル抗体樹立の報告もある。しかしながら、HIV-1の標的細胞であるT<sub>4</sub>のレセプターとの結合に関与するとされるgp120に対するヒトモノクローナル抗体樹立の報告はなく、AIDS患者の治療と感染防御の面からも、強く望まれている。

NIHのNIAIDのFauciらは、Micro Gene Sys社製HIV-1ワクチンの毒性ならびに免疫原性について、成人ボランティアで検討しており、NIDRのNotkinsらとNCIの協力のもとで、今回のプロジェクトが生まれた。私達の行った方法は、基本的にはZaguryらと同様で、HIV-1抗体陽性のヒトPBMCより得たB細胞を、EBVのB95-8株でトランスフォームし、HIV-1抗体産性細胞とF3B6細胞株をPEG-